アカウキクサと牧野富太郎

白 岩 卓 巳*

はじめに

私は水生シダに関心をもって以来，現地の観察を主として継続的に調べている．

機会があって牧野富太郎の業績を調べているとき，晩年の牧野富太郎がアカウキクサに大変強い関心を抱いていたことを知った．

それは富太郎が川崎正悦氏へ出した多くのはがきにアカウキクサを採集し，送付してほしいという依頼のものがずいぶん多いことに気が付いたからである．

川崎正悦（1893～1978）は兵庫県生物学会ではずいぶん活躍し，数々の業績を残している人である．彼は青森県生まれ，昭和3（1928）年神戸にある私立灘中学校教諭として赴任し，昭和34（1959）年まで灘中・高校に勤務し，博物を教えた，博学で豊かな自然人であった．

富太郎とは若いころから交流があった．川崎正悦の一周忌に偲びとして出された『志のび草』（甲南出版社，1979）にのせられた富太郎のはがきをみると昭和6（1931）年以前から文通があり，二人は生涯気のおけない大の知己であったようである．富太郎から正悦への何回にもわたるはがきから推測すると，晩年の富太郎はアカウキクサを執拗に研究したいと念じ，実物を求め続けたことが分かってきた．

アカウキクサ依頼のはがきを年代順に三つの時期に分けてみた．

1. 川崎正悦へのはがき

（1）第一期

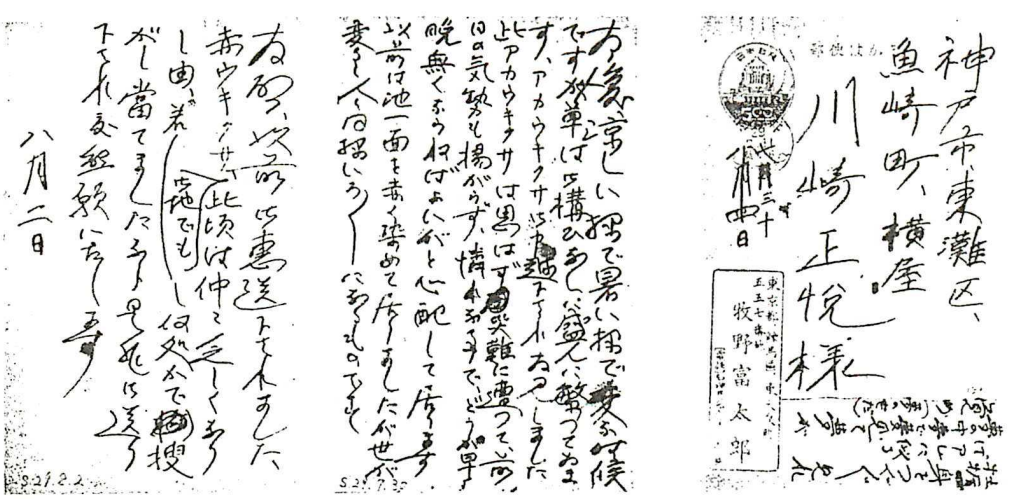
最初は昭和18（1943）年10月16日のはがきである．

「ヒメウキクサを送っていただきありがとうございました．それからアカウキクサが手近にあれば少々いただきたいと存じます．」

続いて同じ年の10月20日，再度依頼のはがきが届いている．

昭和20（1945）年11月22日には送付してもらった礼のたよりである．

「送付していただいたものの中にアカウキクサとオホアカウキクサが混在しています．オホアカウキクサは東京には普通ですがアカウキクサの方は一向にみあたりま



牧野富太郎から川崎正悦に送られたはがき

*657 神戸市灘区鶴甲4－7　21—507

せん」とある．

世界に誇る「牧野　日本植物図鑑」は昭和15（1940）年に出版されている．すでにそこには「おほあかうきくさ」の記載が中心であるが，オオアカウキクサは主として関東に多いのに対して，アカウキクサは関西地方に多いとしている．

（2）第二期

6年ほどの間アカウキクサ送付依頼のはがきはない．昭和26年（1951）年8月16日付けの久しぶりのはがきである．そこには「水草は中中風情があってよいものです．それについて是非お願いしたいのはアカウキクサを少々送って下されば大幸に存じます．小さな古茶筒へでも入れて送って下されば我が池水にアカウキクサが浮きます．どうぞよろしく．」すぐに送付されたかどうかは分からない．

（3）第三期

アカウキクサへの強い執念が出ている数々のはがきである．昭和29（1954）年5月から12月に集中している．

・5月22日　「毎度ご面倒申し上げますが，どうぞ彼のアカウキクサをお送り下され度懇願のいたりにたへません．どうぞよろしく」

・5月27日　「面倒とは存じますがどうぞ赤ウキクサを少々お送りの程お願いします」

・6月2日　アカウキクサの催促のたよりである．

・6月8日　「御面倒ながらアカウキクサをお送りくださらんことを懇願致します」

・7月28日　「彼のアカウキクサを是非お送りくだされんことを懇願致します」

・7月30日　お礼のたよりである．「アカウキクサをお送り下され拝見しました．此のアカウキクサは思わず災難に遭って，前日の気勢も揚がらず，哀れなことでどうか早晩無くならねばよいがと心配しています．以前は池一面を赤く染めていましたが世が変わると人と同様いろいろになるものです」

・8月2日　「以前に御恵送下されました赤ウキクサ，御地でもなかなか乏しくなりし由，もし何処かで捜し当てましたら是非お送り下されたく懇願致します」

・12月1日　「ノヂギク並びに赤ウキクサお送り下され有り難く存じます．そして此のアカウキクサは関東地には全然たへただあるものはオホアカウキクサのみである」

昭和29（1954）年というのは富太郎が93歳の年である．高齢の富太郎はいったいアカウキクサのどこに魅力を感じたのだろうか．引き付けるものは何だったのだろうか．

それとまた正悦はどこからアカウキクサを採集し，富太郎に送付したのだろうか．

2. 川崎正悦はどこでアカウキクサを採集し送付したか

昭和18（1943）年から昭和29（1954）年までの11年間，アカウキクサを求め続ける牧野の意欲の旺盛さには頭が下がってしまう．それだけ東京では生のアカウキクサの入手が困難であったこと，また彼にとって大きな魅力を感じているもので，死ぬ最後の最後まで調べたい植物であったのだということになる．

富太郎に懇願され続けた川崎正悦は何処から生品を採集してきたのだろうか．「御地でもなかなか乏しくなりし由，もし何処かで捜し当てましたら…」昭和29（1954）年ころ，兵庫，大阪などのどこに生えていたのだろうか．正確に調べる方法はないが，昭和22（1949）年，彼の書いた「六甲山に産する羊歯植物（一）」（兵庫生物 No.3 March 30）によると，武庫川付近，裏六甲の池が自生地としてあがっている．現在はもちろん自生していない．

ここ数年の間に出た図鑑に出ている自生地の分布図は過去の標本に基づくもので，現実にそこに自生しているかどうか疑問なものが多い．

その最大の理由として考えられることは自生地の破壊による自生地の後退である．人為的な環境変化による自生地の消滅によることが大きいが，今一つ標本の同定でオオアカウキクサのゼニ型状のものとアカウキクサを混同してアカウキクサとしていたことも多かったのではないか．

私はアカウキクサ属を調べはじめるまで長い間，牧野日本植物図鑑に記載されたオオアカウキクサの図に疑問を抱いていたが，彼の言うひのき葉状で立ち上がっている葉を描いたものであることがわかるとさすがに富太郎はよい標本を選んで描いたものだと感服せざるを得ない．

近畿地方で，今アカウキクサが確実に自生しているといえるのはわずか2～3箇所だといえるのではないだろうか．近畿のシダ愛好者の多くの方に聞いた結果である．

おわりに

どんどん姿を消していきつつあるアカウキクサは，絶

滅が危惧される植物の一種であると言え，保護に当たらねばならない植物である．そういう事実をわたしたちはもっと知らなければならない．

引用文献

川崎先生を偲ぶもの　1979．志のび草．甲南出版社：115～186.

参考文献

牧野富太郎　1940．牧野日本植物図鑑．北隆館：912.
日本シダの会　1987．日本シダ植物図鑑　5．東京大学出版会：784～794.
角野康郎　1994．日本水草図鑑．文一総合出版：13，15.
川崎正悦　1949．六甲山に産する羊歯植物（一）．兵庫生物 No.3：20.

水草研究会第17回全国集会バス見学記

岩 村 政 浩

はじめに

水草研究会と佐賀自然史研究会との共催ということで1994年8月30日に「佐賀での開催OK」の旨，事務局に連絡．早速，会場・宿泊等の予約をし，9月2日には，関係者で，見学コースの第1回の事前調査を行った．以後，「どこで，なにを，どのように」案内したらよいかに的を絞って調査を重ね，1995年8月2日，第5回目の調査で，観察場所，所要時間等を考慮した見学コースの最終的な決定をみた．

そんな中で，見学ポイント①（ヒシモドキの群落）では，水田所有者から見学による畦の崩壊を心配する声もあったが，県庁農村計画課の方（佐自研会員）や自治会長さんのご助力で，結果的には見学の意義を気持ち良くご理解いただき，人情の機微に触れる思いであった．

研究会初日の8月19日は，興味深い研究発表と熱心な質疑応答．90名を越す参加者で，時間をオーバーしての大盛況．夜の懇親会も郷土料理を餌にして大盛会．銘酒「菱娘」で，大いに鋭気を養い，明日8月20日のバス見学に備えてもらった．

バス見学

午前8時30分，はがくれ荘玄関前で記念撮影．宮脇博巳会員から見学上の説明を聞き，3台のバスで元気に出発．バスは北部バイパスを一気に突っ走り，見学ポイント①に着く．

・見学ポイント①（佐賀市鍋島町森田字東新庄）

昔ながらの古い水路に広がるヒシモドキの大群落，水流に沿って水面に横たわった幾筋もの茎，対生の浮葉で季夏（きか）の光が躍っている．ここかしこであがる歓声の中，私たちの心も躍る．

ヒシモドキを水中から引き上げてくれる人，それを標本にいただく人，葉腋に単生した1㎝内外の細長い蕾状の閉鎖花を食い入るように見ている人，腹這いになってレンズを向ける人，様々で，懇親会で紹介した「真剣に仲良く頑張る」という葉隠精神の真髄を本場の佐賀で，見事に発揮されている水草研の面々は頼もしい限り．

ヒシモドキと同様に危急種のヒメコウホネは，水量が多いこともあって，抽水葉が見られたのは岸辺だけで他は若干の浮葉と残りの多くは沈水葉の状態．昨年の異常渇水期には，かなり多くの花をつけたが，今年は7月頃僅かに見られただけで，本番の時は花がなくて残念．しかし，佐賀県下では，ここが唯一の生育地．大事にしたい．〔従来，県西部地方産のものでヒメコウホネとされていたのはベニオグラコウホネであった……角野（1994）同定〕

水田と水田とを仕切る小さい溝ではミズワラビが抽水し，場合によっては幅7～8㎝，長さ15～20㎝の裸葉が見られた．ミズワラビについて発表された兵庫の先生はその余りの大きさに驚嘆されることしきり．

水路の上流にあたる北側では，北米産の帰化植物ハゴロモモが，ゆるやかな流れに微かに揺れていた．あたかも開花中で，互生する矢尻形の浮葉と，糸状裂片が掌状に広がる対生の沈水葉が同時に見られ，多くの会員を惹